Reference Service

の現場から

〈特別寄稿〉

五十嵐 有行*

はじめに

閲覧の係として勤務する以上閲覧者の求めんとする要求に正しく合致する資料の提供こそ閲覧係の本命とすべきだと考えて微力の及ぶかぎり走り廻っている。しかしどの程度までそうした努力が役に立ったか自分には分らないが、後からお礼を言われたりするところを見れば当てていなかったとは思われない。一回一回がなまの勉強になり少しづつ仕事に自信が生れ、生来好きな事だけに増々面白さが湧き図書館員たる事に pride をいだかせてくれた。今まで経験した事は誠に雑多であるのと不勉強のためと、なおかつ、記録もろくにしていないためとで比較的大きく心を動かした事が、ごく新しい事だけしか記憶として残っていないが、苦心した事などはいつのまにか身について、次の来館者に何らかを与えて行く事が出来ると思う。つたない今までの仕事の内容を思い浮べると共に自分の抱負や今後の行くべき方向に思いを致してみたい。

利用者の立場から

吾々は図書館を図書館の殻の中から考えるが逆に自分を図書館を利用する学生なり職員
の立場に置き換えてみれば、どんな態勢が望ましいかがわかる。自分の学生時代を振り返り
かえてみる。図書館とは何をする場所と考えて
のぞんだか、どれだけの信頼感を抱いた
か、係の人はあれでよいものと思ったか等々
回想してみると、図書館は格別に魅力のある
場所ではなく、ただ手許に読みたい本が手
に入らないとき仕方なしに行く場所で、何も

わざわざ面倒な手続きをしてまで借出したり
するに当たらないというような頼りない気持が
先にたったようだ。これは自分が不勉強だっ
たし、またずっと昔の事だから現在と異なる
のは当然であるが、学生時代に内在した図書
館に対する安易な気持が、今も完全に払拭さ
れているとは思われない。何かこんな気持が
底流にあると思う。何のためか？ 研究者は
勿論学生も大学人である。殊に医学部に於い
てはインターンがすみ、学士試験が終りさえ
すればれっきとした先生になる訳で、最初か
らエリート意識が強いから専門の資料を果し
て自分のために図書館人が提供出来るかどう
かに疑念を抱くのは当然である。このような
気持が閲覧者と図書館人が最初から気楽に話
し合うための壁となっているのが、原因の一
つと思う。利用者は兎角すると図書館は研究
資料を保管してある場所<蔵>といった昔風
の考え方におち入りやすいから、求められた
資料を充分に調査する事なく謝絶するような
事があったなら増々図書館と遊離する。軽い
気持で図書館に来る閲覧者が少ないのは両者
の最初の壁が完全に取り払われないためであ
ろう。こんな事情もあることだから、refer-
ence librarian としては少しでも要求に合っ
た資料を早く提供するために努力するのが最
初の目標とし、来館者の気持を忖度し少くとも
一度でも来た人にいやな後味を抱かせない
ための努力がいる。

利用者別のサービスを

閲覧は来館者の層によって求める内容もまた
利用の方法、目的も異なるから大別して次

* Ariyuki IGARASHI 金沢大学医学図書館

のように考えてみる。

A) 学内事務系の人, 他の学部の人, 学外好事者, B) 学生, C) 教官, 研究員, 大学院学生。本学の場合 A) は人数も少ないし求める要件も研究のためとは離れたような事が多い。本学と関係のある特定の人の生年月日, 履歴, 論文の標題, 著書などはまだ調べられるが, 人となりなど求められる時は昔一緒に仕事をした人とか本学に長く勤務している人などを紹介する外ない。その他本学の歴史的記録, 新しい化学機器の用途なども尋ねられる。一度大正時代皇太子殿下が行啓された時の記録など求められた事があったが新聞の縮刷版があって事足りた。学外の好事者は医学書を求めるに違いないが, 自分に関心のある方向の事をまとめた新しい図書でもあれば喜ばれる。次に B) の学生の場合も主として単行書であるが利用しに来る時は矢張り試験のためが多い。Text book なら全部ではないにしても一応自分で持っているが, 試験の問題は現代医学の新しい課題となっている部分(すなわち text book ではその他と書いた部分にあって二三行しかふれてないところ, この事についてはなお不明な点が多い, 諸説があるなどぼやかした表現がもちいられるところ)一を対象としていることが多く, さらに基礎の場合に臨床との関連, 臨床の場合には基礎と組合っていることが多い。だから質問する人自身どんな方向の本を見たら求める事が一番よく書いてあるか, わからないことが多い。胸腺の腫瘍の病理を内分泌といってさがしたりするたぐいである。そのため求める対象が見当はずれになって聞えたりする。“血漿蛋白”とだけ言われたりした時すぐそのままに受けとらず総説的に書いたものか, 血液凝固との関係, 免疫との関係, 化学組成, 輸血, 分画法, 特定疾患における成分の増減など関連する箇所をあげてどの部類に属するかをはっきり言ってもらう。ここを正確につ

かまないとどの本がよいか分らない。昨年, 膠原病について病理の試験があった時, 学生は病理のテキストにふれるところが少いため collagen disease なる title の本を求めたがった。Title にその通りの名前が出た本は二冊ぐらいしかなかったが5人も6人も皆同様の注文のため, たちどころに借り出され後から来た連中は適当な本がないと不満そうだった。閲覧室の棚に何冊も利用出来る本があるのに題名が膠原病とか collagen disease とか書いてないといすぐ間に合わないと思う。それで “Inflammation and diseases of connective tissue” とカリウマチ, リウマチ新説, “Practice of allergy” 臨床アレルギー, 皮膚病理学強皮症などの本を出して利用してもらった。これらの本の中には膠原病の全般についてはふれていないものもあったが, かなり役に立った。同一の方向の本に違いないが, 主題が多岐にわたる場合同一個所にも置かれなため平常吾々が心していないとい本ももちいられない。一時新聞で話題をよんでいた “Rh-” 血液型にしても, 始めから輸血か血液型の本を探して, 思うように書いてないと困ったようにみえる人があった。くわしく関連領域にあたる血液学, 遺伝, 血清学, 法医, 救急療法, 大きな外科の手術書など考えて探せばよいのにつこんで探そうとしない。本棚の前で当惑した様子にみえる人や, やたらに本ばかり引出しているような人のあった時は, ただちに近よって何を求めているかを聞き, その人と同じ事を自分が調べる気持で探がす。自分は別に医学を学んだものではないから失敗をいわず臆せずにこれなら役に立つと思う資料を提出し, いけない時はそれについての批評を聞き, 不分明だったら問い直して更に合ったものを求めることにしている。特別新らしい topic のような事とか地域的にでも限られた事, 社会医学に関連のある隣接科学の問題などはともかく, なにか

参考になる事は得られるものであるから、その時わからねば、学年、名前などを聞いておいて資料が得られたらその時連絡する。

PR とオリエンテーション

利用図書の検索選択のためには目録の重要性を無視してはならないが、いかに精巧な目録が作られたとしても資料の検索のための一つの手続であり図書館員の仕事を手伝ってくれるものに過ぎない。だから閲覧者の利用の仕方如何で可とも不可ともなりかねない。殊に学生は目録カードを落着いて調べたりしないから馴れるように誘導するのも大切だが、図書館に親近感を充分にもって、何でも気軽に相談しかけてくれる風潮に持ち込むのが先決だと思う。図書館に来る回数さえ多くなれば自づと目録の使い方にも馴れてくる。図書館員は出来るだけ閲覧者の気持を理解し更に手となり足となって協力するだけの心構えを持って仕事につきあたらないと、図書館自体の不評となってはねかえるのである。閲覧者は自己の勉学のプラスになるものさえあればいくらでもまだまだ吸収する。その材料を蔵しながら提供するのを怠っては図書館の価値は減殺される。ここにサービスがなりたち、これがなければ図書館はあり得ない。自分のみるところでは毎日日課のようにして図書館に足を運ぶ人の数は少ない。インターンの間も含めて5カ年間の学生生活中に一回も姿を見ない人さえあるのではなからうか。之に対し入学早々から来た人は後に教室で研究するようになって、調べたい事があれば直ちに来て何でもたずねてくれる。こうして考えてみると、施設の近代化による快適な環境が整備されていないこと、PR 活動の不足もさることながら、オリエンテーションによる図書館認識の深まるのを期待したい。要するに学生に対してはその心中の pride 感を充分察知しながら勉学意欲をもりあげるように補導し、先方がとまどっている様子をみたら求め

るところを聞き資料を検索、提供し、気楽に話し合えるように相互のへだてを取り除くために努力する。

C) の教官や大学院学生を含む研究員は、もう先生だから一応自分の所属の教室とむすびついた一次資料の利用が主となってくる。それだけに求められる事もずっと複雑化する。研究のはじまる当初は Annual review や Advance のような新しい研究の動向をさぐるようなものから手がかりが求められる。この時は雑誌の名前も充分知らず、original な文献の多い本か、abstract が大部分になる本か、発行回数その他も知らない人が多く、唯 reference に挙げてあるところを列記するため、論文の題ばかり書いて誌名その他肝心のところを書きおとす例まであった。こんな時には解説をしたり今後のために tool の使用について実地にみてあげることにしている。しかしいつも来館する人の中にも二次文献について充分知らないためか、直接的に自己の研究と関係の少い部分について調べねばならないことが起ったときなど、新しい図書や雑誌から関連のあるものを見つけてほしいなどいわれる。ハシカワクチンの副作用として頭に影響のある例を求められたが Index Medicus の新着の分からさかのぼって vaccination を key word に検索した。先日でも糖尿病の全般にふれた図書を出して見せて欲しいといわれた。病理の先生だからかえて内科学大系のような臨床の本がよいかと思って見せたら古すぎるといわれた。それでどんな種類の糖尿病かを尋ねたとき、“Heart disease in infancy and childhood” なる本を手にしたので病院から廻った材料が糖尿病で先天性心臓奇形だったのでないかと思い、“Congenital heart disease” と “Congenital malformations of the heart” の二冊と雑誌糖尿病の二冊を出してこと足りた。このような場合研究者にすればゆっくりカードなど引く時

間もないのかもしれないが、求めんとすると
ころをはっきり教えて欲しい。

今までのところ Chrolophyl の栄養についてドイツ文献を本学所蔵の雑誌の中から求められ“Index Catalogue of the Library of the Surgeon-General's Office”より索出した程度で retrospective search といってよいようなことは殆んど数がないが、今後このような依頼の出た時は医学は二次資料として立派なものがあるだけにフルに活用して役に立てたい。そのためには MeSH の二カ所三カ所で重なる key word など、どこ分野でどう結び合うか解明したい。今研究者から求められるのは期限付で調査しなければならない時とか、めずらしい患者があった時とか、剖検したら思わぬところに謎があったりした時などの文献であり、この場合文献の数よりも何か手がかりを早く手に入れたいようにみえる。研究者の求めるのも雑誌ばかりではない。先年腎血管性高血圧の本を求められたが、hypertension の国際学会の proceedings にも見当たらないので困ったけれども、数カ月たって英語の単行書が発売されたのを知り知らせてあげた。また6、7年前だったが、富山県の神通川流域に発生する地方病“いたいいたい病”について探したことがあったが、最初骨軟化症についての栄養的見地から書いたものという話だったが、この地方病の病源についての研究とわかり“臨床栄養”“日本農村医学会誌”“労働の科学”昔の“十全会雑誌”，更に明治時代の婦人科医によって書かれた“富山県奇病論”富山県警察部の調査書など古い書物を引出して、従来不明とされたところを調べてもらった。

しかし調査は一つの主題について長期的に新着雑誌から検索するのとは異なり、その時その時の閲覧者の意図に応ずることとなる。完全な文献の screening などは依頼もないため手がけていない。しかし新着雑誌を展示して

いて特に目につき、これはあの先生が求めていたなどと気のつくものはメモして知らせる。I M, Excerpta Medica, Current Contents などにやがてのるには違いないがつづけて記録して行きたい。こうしたことのために professor の研究の方向と各教室がどんなグループに分れてやっているかを把握するように努める。これと借用文献の title を考え合せればその人がどんなグループに属するか判明する。勿論多くの研究者しかも年々交代する人々を全部知ることは出来ないが、接する機会の多い人については大体手にされる誌名は見当がつく。こういったことも reference service に直結することだと思う。

医学の動向の正しい把握を

以上閲覧者を分けて吾々の対するところを書いてみたがどの場合についても考えねばならないのは医学の動向を正しく catch するために努力することである。新聞に一寸載った記事にも進歩して止まぬ学問の片鱗がうかがえる。昔は癌の基礎的な研究にしても病理学の上から主として考えられた。だが癌が実験的に作られ、発癌因子の追求となると生化学の上からの研究が欠かせなくなった。そして化学とともに制癌剤の研究となり、その発生を、生物物理的に化学物質による DNA 分子内の電荷の移動の面から、またウィルス—バクテリオファージの遺伝、アゾ色素、ホルモンの果す役割、放射能の影響などから研究されるようになって来た。一方病理の方も網内系などの研究は超ミクロの世界に進み、電子顕微鏡の出現に驚く間もなく、放射線を利用して更に更に拡大し、現実の細胞の立体像をとらえんとしている。いうなれば癌の基礎の研究といっても病理細胞学、生化学、生物物理学、ウィルス学、生物放射線、遺伝学、内分泌学等々が分子生物学的な考え方と結びついて研究されている。こうしたことは癌の発生などという今の医学の頂点に立つような部

門のみに限らず、すべての分野で起っている。それで研究が進めば進むほど頂点をめざす研究は多角化し、複雑化して一昔前に考えていた方向のみでは一角のみを見つめていることとなり、全容の把握が出来ない破目に陥る。それでは利用者から求められることの見当がつかない。従って吾々の reference はいつでも研究の進歩とともに動くものであることを銘記して医学の最近の進歩を見つめなければならぬ。

次に医学の特殊性を考えねばならない。吾々に与えられる質問が変化し多角化するのは医学の進歩に結びつくが、この複雑化を他の科学と較べるとき、ずっと高度なのではなかろうか。実際人は一寸した風邪にも全身に苦痛をおぼえる病気一異常は全身につながる人間という生体の異常状態を究明して正常な状態へ導く方法を求める科学だけに、研究にもこの通りのことが現われる。なるほど各科に分れて研究されているが、各々のグレンツゲビートは重なり合う面が多く、時にはいくつものその重なる面をつらねて新しい学問体系が成立し複雑化がはげしくなる。どんな科のどんなことも別の科とつながる。人間の科学であれば当然かもしれない。これは医学が applied science であるがための宿命であろう。基礎の教室で卒業後10年もこの道に努力していたある先生がもらされた言葉だが、「どうしても医学は分らない。系統を整然とさせることが出来ない。これでまとまるかと思うと、他の科学の研究が障壁となりつまづく。自分のやっているのは医学の中では一番筋道の通った学問だと思うが、ここでさえ数学や物理学のように系統のたった考え方がとれない。いつでも中間で別の事とぶつかる。」つまり医学は応用科学で別の科学の進歩発達をとらえて人体研究に応用するものだから、はじめの科学では正しいとされる事も複雑な生体機能に於いては、その rule を通すと無理

が起ることがあるのであろう。血液の化学などの実験研究には化学者の考えと異なるところが多いときく。こうして他の科学の進歩は宿命的に医学研究に難問を持ちかけて医学の進歩を助長する。医学では、一部に他の科学が導入されて成果をあげたとき、たちどころに拡がりどことでも結び合う。これは化学、物理、エレクトロニクス、ウィルス、R. I、統計学などの実情を見ても明らかである。これが医学の複雑さの大きな原因だと考える。勿論他の科学にも同様な事があるに違いないがこれ程の事はないと思う。それで reference にあたるものは、自然科学、社会科学の系列と較べ合せて考え、どんな質問のあったときでも先ずどの系統と結びつくかを判断する事が必要だと考える。

おわりに

以上で本学の reference の実情とそのため必要と考えられる医学の認識について述べたが、最後は今後に処する librarian の心構えに触れて稿を了えたい。

図書館の窮極の目的は、利用者への service に尽きる。その service の最先端に立つのが閲覧・参考係である。その仕事が兎角すると図書館の中で軽視されがちになる。実際どれだけよくやっても利用者は当然のこととしてみるのがあたりまえで、逆にわるくやると図書館の窓口であるだけに、館全体の不評となって返ってくる。今後の図書館の発展に思いを至すとき、一番図書館の目的に合致するのは常に研鑽に努めて、利用者の要求に正しく合致した service を提供すべきである。この気持が館全体にわき上らねば図書館の向上は望めない。如何に立派な機械も操作するのは人間である。大学の使命と直結する仕事の重大性を勘案して、自らの仕事の責任をいなく心の持ち方が肝要であると思う。